

地域で支える子育てを実現する集合住宅団地の計画

建築計画研究室 古賀 航成
(令和6年2月7日提出)

1. 研究の背景と目的

家庭環境は複雑化した。ひとり親世帯や共働き世帯の増加により子育てにおける負担の増加のみならず、児童虐待、いじめ、非行などの子どもに関する問題が指摘されている。

子育て世帯における問題は、遊び場の減少、室内遊びへの変化による運動不足、健康的な食事の不足、外出の減少による地域コミュニティの希薄化、親のひとりの時間の減少など様々な要因が複雑に絡み合うことでひとつの大きな問題となっている。

子育て世帯の親の負担を軽減し、すべての子どもが平等で健康的な環境で遊び、教育を受けられる社会を築くために、地域社会で連携して子育てを支えあえる住環境が必要であると考え。以上より、子育てを支える地域社会づくりのための集合住宅団地を提案する。

2. 対象敷地

対象敷地は徳島県徳島中昭和町4丁目の約4700m²の土地とする。徒歩約5分の距離に小中学校が位置し、子育て世帯が多く暮らす地域である。しかし、公園等の安全に遊べる場所や地域交流の場となる教育的、文化的な施設が少ないため、まちなかで子どもが遊ぶ姿や親同士が会話を交わす姿はあまり見受けられない。対象敷地は東の路地、北、南、西の一般道路の4方向に接道しているが、現在は駐車場として利用されており、東西の2方向は柵が立っているため、出入り不可能である。周辺は低層木造住宅密集地で囲まれている。また、中昭和町は津波最大水深予測3mの街である。



図1 敷地周辺地図

3. 集合住宅団地の計画案

提案する集合住宅団地の計画にあたり、また、地域の人々や子どもたちが集まり、交流の拠点となるように集会所や託児所を設え、世代を超えて集まる場所や、子どもたちが大人の目の届く安全な環境で自由に遊びまわることができる空間づくりに配慮する。

①配置計画

柵で防がれていた東西の接道部分を開放し、東西南北四方からの出入りを可能とする。4つの接道に通り抜けできるようにすることで、団地と周辺住民との距離を近づける。駐車場と駐輪場は敷地の東西南北に分散させて配置することで、各住戸までの動線を短くする。また、それぞれ1か所にまとめて配置することで自動車や自転車の敷地内深くへの進入を防止し、歩行者との明確な動線を分離することで、安全な敷地内の通り抜けを可能とする。

4方向からの動線が交わる敷地の中心部には子どもが遊び、周辺住民も多数集まる広場として余白を残し、その周辺にボリュームを配置する。周辺の街並みとの調和のため、独立型の住戸を敷地全体に分散させる。各住戸は2つの四角いボリュームをつなげた形状をベースとし、住戸や周辺住宅の採光条件を悪化させないように配慮しつつランダムに分散させている。さらに、それぞれ住戸の角度を少しずつずらすことで、玄関からの住民同士の視線がわずかに離れ、距離感を適度に保つ。一般的な共同住宅では可変性を持たせることが困難であったり、上下階の騒音、振動が伝わってきたりするなど対応が難しい問題が存在するが、ここでは各住戸が独立しているため、子どもの成長段階に合わせて間仕切り壁の設置や取り壊しを想定した計画が可能であり、また、騒音問題の減少やプライバシーの確保を向上させることができる。

住戸のランダムな配置と角度によって規則性のない凹凸のある外部の平面空間が形成される。そこに植栽な

どで回廊を巡らせることで適度な風の抜ける動線をつくる。左右に蛇行する動線となり、中心部の広場まで抜けていく。住戸と植栽の配置によって回廊の中にできた幅の広い通路や閉塞感のある狭小空間があり、周辺のボリュームの角度のずれと相まって景色や日当たりが変化する。これらのスペースは落ち着いた空間として少人数の子どもで集まったり、地域住民が本を読んだりしてゆったり過ごせる場所としている。

広場の周囲には集会所や託児所、櫓などの共有スペースを設けている。それぞれのボリュームの正面を広場に向けて配置することで子どもの活動空間を包み込み、セキュリティを向上させている。また、団地のランドマークとして広場の南北に2塔の櫓を設けている。

②住戸計画

リモートワークのスペース、来客用のスペース、子どもとのコミュニケーションを活発にする距離感など間取りの要求や優先順位は各家庭で異なる。これらの多様な家族のニーズに対応するため大きく3タイプの間取りに分けて計画した。タイプ1は共働き世帯向けのリビングアクセス型としている。子どもの帰宅時の様子がわかりやすく、来客時にも安心できる。9戸をリビングアクセス型としている。タイプ2は共働き世帯向けの2階リビング型としている。リビングと子ども部屋の距離間が近づき、親の目が届きやすくなる。リビングの上がり畳のパーティーションで仕切ることによって子供部屋のような使い方をすることもできる。9戸を2階リビングとしている。タイプ3はひとり親世帯向けの土間リビング型としている。親がいない時間帯が多くなるひとり親世帯では親子のストレス増加による虐待、いじめ、非行が最も多くなるともいわれている世帯であるため、来客を招きやすい土間リビング型としている。ひとり親世帯は約1割を占めるため2戸としている。

③集会所計画

住戸と同様に2個のボリュームで構成した。西側のボリュームは浮かせることで1階を外空間としている。1階の外空間にバーベキュースペースを設けた。火を囲んだり、直接日陰で休憩したりする場所となる。隣接する東側のボリュームには共有キッチンを設置した。誰でも利用可能であり、子どもが大人から食事を共にすることで、交流の機会、家事を学ぶ機会となる。2階西側は飲食スペースであり、親同士の交流場所として利用する。広場に向けて設けたオープンなベランダを通して視線が届くようにしている。東側のボリュームには机、本棚、ボードゲームを置いて、子どもが自由に使用する。また、こども意見箱を設置し、「このマンガがほしい」「祭りがしたい」など子どもが自由に願いを書き込み、積極的に取り入れていく。

④託児所計画

敷地内に託児所があることで非常時でも一時的に預けることができる。周囲の居住者に見守られてセキュリティも高く、子育て世代には安心できる。2階のベランダから櫓に直接アプローチすることができる。

⑤櫓計画

広場の南北に2塔の櫓を設置した。団地全体と見渡すことができる。北の櫓は遊戯塔、南の櫓は展望塔である。遊戯塔は子ども向けの遊具を備え付けている。ネット、ボルダリング、黒板を設え、登るにつれて遊びを多様化させている。遊戯塔は託児所とつなぎ、直接行き来することができる。展望塔は地域住民向けの展望台であり、展望塔よりも高さを上げている。連続的に変化する様々な角度から街並みを見渡すことができる。住宅に囲まれた閉塞的な空間から徐々に視界が広がっていく。

こどもの日、クリスマスなどのイベント日には2つの櫓をロープでつないで鯉のぼりを揚げたり、イルミネーションで飾ったりして人を広場に引き寄せる。

また、2塔の櫓は津波発生時に避難塔として利用することもできる。

5. まとめ

世代を超えた多様な地域コミュニティを形成することで互いに孤立することなく生きがいを感じられる社会の実現につながると考えている。そして、子育ての不安からくる少子化に歯止めがかかるきっかけになることを期待している。



図2 全体パース